

名作文庫通信



2023年 秋号

秋季特集

夏目漱石と仲間たち

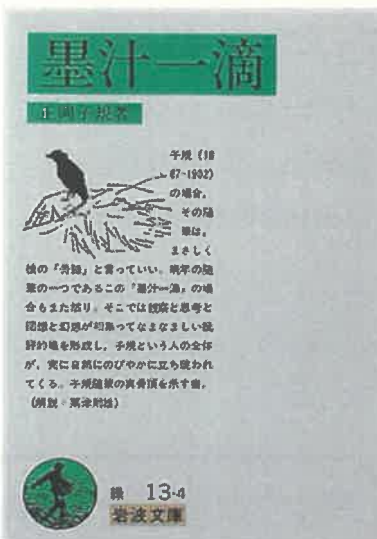
寺田寅彦、鈴木三重吉、内田百閒、和辻哲郎、芥川龍之介ら夏目漱石の門下生や、親交があった文人たちの作品を集めました。



【羅生門・鼻】

芥川龍之介/著 新潮文庫/刊

芥川龍之介は、東京帝国大学の学生時代、久米正雄、松岡譲らと、漱石山房を訪れた。漱石最晩年の門下生だ。漱石は、『鼻』を激賞し、作家となることを薦めた。龍之介の随筆に『漱石山房の秋』があり、漱石の住居、書斎の様子が詳細に描かれている。ほかに、漱石の思い出を綴ったものとして、『漱石山房の冬』、『葬儀記』などがある。漱石の葬儀で、受付をしていたとき、森鷗外が会葬にきたそうだ。



【墨汁一滴】

正岡子規/著 岩波文庫/刊

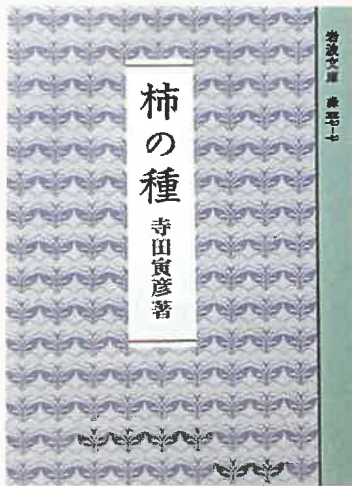
正岡子規と夏目漱石とは、同年に東大予備門に入学し、大学へ進む。親しくなったのは、二十二、三歳の頃。子規は大学を中退し、新聞社に入社。日清戦争従軍記者となり渡清するも、帰国の船内で咯血し、一時、危篤となる。療養のため、一時、愛媛県松山に帰郷。その年、漱石は松山中学で英語教師をしていた。子規は、漱石の下宿に五十日ほど居候する。再び上京し、病床で文筆活動を続けるが、七年後、肺結核のため亡くなる。漱石はイギリス留学中だった。

「名作文庫」とは？

下井草図書館では文学、哲学、思想、歴史などの名著名作を文庫版・新書版で集め、「名作文庫」としてご紹介しています。



今月の1冊 心の旅を描く物語



【柿の種】

寺田寅彦/著 岩波文庫/刊

物理学者の寺田寅彦は、熊本の五高で、漱石から英語を学んでいる。当時から、漱石宅を訪れていた。「俳句とはどんなものですか？」と質問すると、「レトリックをせんじつめたものだ」といわれた。以来、句作を始める。『柿の種』は、俳句雑誌に寄稿していた短文集だ。寅彦は門人たちの中でも、特に漱石と親しく、音楽会や、展覧会などに、一緒にでかけていた。『吾輩は猫である』では、寒月のモデルとなっている。

新着本 新しく買った本のご紹介

ヴェーロチカ/六号室
チーフホフ傑作選



【ヴェーロチカ/六号室】

チーフホフ/著 浦雅春/訳 光文社古典新訳文庫/刊

世話になった屋敷の娘との別れ際、心が動かない青年を描く「ヴェーロチカ」や、精神科病棟の患者とのおしゃべりに愉しみを見出すも、周囲との折り合いが悪くなっていく医師を描く「六号室」など、チーフホフの短篇6作を収録。(TRC MARKより)



井原西鶴
中嶋隆の訳



【好色一代男】

井原西鶴/著 中嶋隆/訳 光文社古典新訳文庫/刊

7歳で腰元をくどき、12歳で風呂屋女と寝る早熟な世之介。放蕩のすえ勘当され、地方を遍歴するが、その後遺産を相続し、名高い遊女たちとの好色生活を続け…。日本初のベストセラー小説を画期的新訳。(TRC MARKより)

編集後記

漱石ゆかりの地へいった。東西線早稲田駅を出ると、夏目坂の上り口だった。角の酒屋の裏に、誕生地の碑があり、そこから、15分ほど歩いたところに、漱石山房記念館があった。記念館入口近くに、漱石がいた頃と同じように、芭蕉の木が植えられていた。館内には、漱石の書斎が見事に再現されていた。お土産に漱石の顔がプリントされたバッジを買った。

発行：杉並区立下井草図書館

杉並区下井草3-26-5

